

# 鳥取市上原方言のアスペクト

神部 宏泰

## I はじめに

- (1) 調査対象地：鳥取市上原は、市域の南西部に位置する、戸数49、人口約200の農業地域である。昔から、農業を生業としてきた地域で、現在も全部が兼業農家である。米、梨が主な産物である。
- (2) 調査年月日時：①1994年2月2日午前10時～13時 ②〈補充調査1〉同年3月9日午後3時～3時30分 ③〈補充調査2〉同年3月22日午後4時30分～5時
- (3) 話者：伊奈 辰喜 昭和33年9月13日生（36歳）小学校教員〈大学院生〉
- (4) 調査者・調査場所：神部 宏泰・大学研究室
- (5) 調査方法・調査時の状況：あらかじめ、調査項目を、ねらい、要望と共に話者に托して、事前の準備をお願いした。話者は、土地生え抜きの教員で、現在、兵庫教育大学大学院修士課程（国語学専攻）に在学中である。方言研究の講義や演習にも参加していて、このような研究についての関心や意識は強い。実際の聞き取り調査は、双方とも方言研究演習の気構えで実施した。
- (6) 表記方法：①カタカナ表記。②できるだけ、問題項目を含んだ文表現を掲出するようにする。③アクセントは上線によって示す。④〈〉の中は、問題部分の原形解説的訳。⑤（ ）の中の注記は話者の内省。⑥～は省略を表す。

## II 調査結果

1. (昔は) よく行ったものだね マエワ ヨー イキョーツタ ナー。〈行きおった〉
2. (あのころは) おもしろかったなあ マエワ オモシロカリョーツタ ナー。〈おもしろかりおった〉(全般に用いるが、特に古老に多い。30歳以下ではごく稀。)
3. (もうちょっとで) 落ちるところだった モー チョットデ オチサーゲダツタ。〈落ちそう気だった〉(全般に用いる。)
4. (今にも) 落ちそうだよ サイフガ オチカキョール デ。〈落ちかけおる〉(友人に対して。)
5. (財布を) 落として ①サイフオ オテーテ シャツテ、〈落としてしまって〉(古老の言いかた。) ②～ オテーテ、(古老はこうも言う。) ③～ オトイテ、(若い層ではこれが多い。)
6. 困っている サイフオ オテーテ コマリョール。〈困りおる〉
7. (一本の蝋燭が今にも) 消えそうだよ ①ローソクガ キエサーナ デ。(消えそうな) ②～ キエサーゲナ デ。〈消えそう気な〉(両者の意味に、とりたてるほどの差はない。)
8. (今) 消えようとする ①ローソクガ キエカキョール。〈消えかけおる〉②～ キ

- 工カケトル。＜消えかけておる＞③～ キヨール。＜消えおる＞④～ キエサーナ。＜消えそうな＞⑤～ キエサーゲナ。＜消えそう気な＞
9. (完全に) 消えた トートー キエタ。＜消えた＞
10. (すでに) 消えていたよ ローソクノ ヒワ モー キエトツタ デ。＜消えておった＞
11. (何本もの蠟燭が順に) 消え始めた ①ローソクノ ヒガ キエチャータ。＜消えだした＞②～ キエダイタ。＜消えだした＞ (①よりはこの方が一般的。特に若い層はこれ。) ③～ キエカケタ。＜消えかけた＞
12. (何本もの蠟燭が次々) 消えていくなあ ①ダンダン キエテ イク ナー。＜消えていく＞②～ キエテ イキョール ナー。＜消えていきおる＞
13. (何本もの蠟燭が順に) 消えているよ ダンダン キエテ イキョール デ。＜消えていきおる＞
14. (何本もの蠟燭が全部) 消えているよ ゼンブ キエトル デー。＜消えておる＞
15. (何本もの蠟燭の火を次々) 消しているよ ①ローソクノ ヒオ イマ ケショール デ。＜消しおる＞②～ ケシマワショール デ。＜消し回しおる＞ (非難めいた言いかたにもなる。) ③～ ケシマワショールガ ドンナダエ。(決定的に非難の言いかた。)
16. (もう全部) 消しているか ①ヒワ ゼンブ ケシトル チャー。＜消しておるか＞②～ ケシテ ヤー。＜消したか＞
17. (今にも桜が) 散りそうだ ①サクラガ チリサーナ。＜散りそうな＞②～ チリサーゲナ。＜散りそう気な＞
18. (ちらほらと) 散り始めた ①サクラガ チリチャータ。＜散りだした＞ (～チャータは古老に多い言いかた。) ②～ チリダイタ。＜散りだした＞ (この方が一般的。特に若い層はこれ。)
19. (今現に) 散っている ハナガ チリョール。＜散りおる＞
20. (桜の木がすっかり) 散っている ハナワ チツテ シマツトル デー。＜散ってしまっておる＞
21. (地面 一面に) 散っている ハナガ チツトル デー。＜散っておる＞
22. 今にも降りそうだ ①アメガ フリサーナ。＜降りそうな＞②～ フリサーゲナ。＜降りそう気な＞③～ フツテ キサーナ ナー。＜降ってきそうな＞
23. (あの時は今にも雨が) 降りそうだったなあ ①アメガ フリサーナツタ ナー。＜降りそうにあった＞②～ フリサーゲナツタ ナー。＜降りそう気にあった＞③～ フリサーダツタ。＜降りそうだった＞
24. (あの時はもう実際に雨が) 降っていたよ モー アメガ フリョーツタ デ。＜降りおった＞
25. (あの時はやがて夜が) 明けようとしていたよ アントキヤー モー ヨガ アケカ

- ケトツタ デ。〈明けかけておった〉
26. (来年の今ごろは家を) 建てている ライネンワ イエオ タテオーローケー、〈建ておろうから〉
27. (来年の今ごろは家をすでに) 建てている モー イエオ タテトローケー アソビニ キンサイ ナ。〈建てておろうから〉
28. (あの家はよく) 磨いてある ①アンネワ ヨー ミガイテ アル デ。〈磨いてある〉②～ ミガイトル デ。〈磨いておる〉(こうあれば、状態継続の意が強くなる。)
29. (隣の犬が) 鳴いている イヌガ ナキョール。〈鳴きおる〉
30. (隣の子が) 泣いている コドモガ ナキョール。〈泣きおる〉(29と差はない。)
31. (子どもたちが) 喧嘩している コドモガ ケンカ ショール デ。〈しおる〉
32. (家に) いるかなあ ○○サンワ イエニ オル カイナー。〈おるかなあ〉
33. (○○さん) いるか ①○○ワ オツ ダカ。(ごく親しい相手に。)〈おるか〉②○○サンワ オンサル ダカ。〈おりなさるか〉(これが普通。友人にもこれを用いることがある。)
34. (ああ) いるよ オル デ。〈おる〉
35. (そういう人も) いるよ ソーユー ヒトモ オル ナー。〈おる〉
36. (あなたは今何を) していたか ①アンター イマ ナニ ショーッタ エー。(これが一般的。)②～ ナニ ショーッタ ダエー。(例えば母親が子どもに。)③～ ナニ ショーッタ ダイヤ。(詰問的。乱暴な言いかた。)
37. (私は今金魚を) 見ていたよ イマ キンギョー ミューッタ デ。〈見おった〉
38. (金魚が今にも) 死にそうだ ①キンギョガ シニサーナ。〈死にそうな〉②～ シニサーゲナ。〈死にそう気な〉③～ シニカキョール。〈死にかけおる〉④～ シニカケトル。〈死にかけておる〉⑤～ シニョール。〈死におる〉
39. (やっぱり金魚は) 死んでいたよ ヤッパリ キンギョワ シンドッタ デ。〈死んでおった〉
40. 読み始めていた ホンオ ヨミカキョーッタ。〈読みかけおった〉
41. 読み始めたところへ(～た) ホンオ ヨミカケタ トコニ、(読みかけたところに)
42. 着くと同時に～した ツクナリー、〈着くなり〉
43. 着くと同時に～してくれ ツクナリーニ デンワ シテ ゴセー。〈着くなり〉
44. 鳴りつづけている デンワガ ズーット ナリョール。〈ずっと鳴りおる〉
45. (先生は今何を) しているか センセー イマ ナン ショーンサルデス カ。〈しおりなさるですか〉
46. 好きだ アノ センセーオ スイトル。〈好いておる〉
47. 見られているのも アノ センセーワ ミラリョールンモ シランデ ネットンサル、

<見られおるのも知らんで>

48. (今、運動会が) ある イマ ウンドーカイガ アリョール デ。<ありおる>
49. (降らなくて) よかったよ ①キョーワ アメガ フランデ エー ガ。<降らんでよい> (これが多い。特に若い層はこれ。) ②~ ヨカリョール ガ。<よかりおる> (古老が稀に用いる。)
50. (先生がこっちへ) 来つつある ①センセーガ コッチー キョーンサル デ。<来おりなさる> (敬語の、進行の言いかた。) ②~ キョーンナル デ。<来おりなる> (敬語「なる」が用いられてはいるが、かなりくだけた言いかた。) ③~ キョーラレル デ。<来おられる> (共通語ふうの言いかた。)
51. (犬がこっちへ) 来つつある イヌガ キョール デ。<来おる>
52. 似ている ヨー ニトル。<似ておる>
53. (一週間も前から遊びに) 来ている ダイブ マエカラ アソビニ キトル デ。  
<来ておる>
54. (昔から) 苦勞していない アレーワ マエカラ クロー シトランケー ナー。  
<苦勞しておらん>
55. (今はあまり) 苦勞しないでいる イマー クロー シトラン。<苦勞しておらん>
56. ~は売っているが、~は売っていない タバコワ ウツトルケド サケワ ウツラン。  
<~売っておるけど~売っておらん>
57. (昔からタバコを) 売っている マエカラ タバコー ウツトル。<売っておる>
58. (今、大売出しで衣料品を) 売っている イマ オーウリダシデ イリョーヒンオウリョール。<売りおる>
59. (もう三回) 来ている コノ ミセニヤー サンカイホド キトル。<来ておる>
60. (いつも) 来ている ①コノ ミセニヤー イツツモ キョール。<来おる> (動作の反復・継続に焦点がある。) ②~ キトル。<来ておる> (反復状態の存続・継続に焦点がある。)
61. (昔はいつも) 来ていた ①マエワ イツツモ キョーッタ デ。<来おった> (動作の反復・継続。) ②~ キトッタ デ。<来ておった> (反復状態の存続・継続。)
62. (前に一度) 行っている アノ ミセニヤー マエニ イッペン イツトル デー。  
<行っておる>
63. 先に行っておいてほしい ①フタリデ サキニ イットイテー ナ。<行っておいて> (先に目的地に行き着く状態に焦点がある。) ②~ イキョーッテー ナ。<行きおって> (先行する動作に焦点がある。)
64. 待っていなさい ①ココデ マットンサイ。<待っておりなさい> ②~ マテオーリンサイ。<待ちおりなさい>
65. (外に) 待たせてあるよ ソトニ マタシトル デ。<待たしておる>

66. 食べておいておくれ ①ヒトリデ ゴハンオ タベトイテ ナ。〈食べておいて〉  
 (例えば親が子に) ②～ タベトイテ ナ。〈食べておいて〉(突放した感じ。)
67. (昔と) 違っている マエト アジガ チガツトル ナー。〈違っておる〉
68. (昔は今のと) 違っていた マエワ イマト ダイブン チガツツタ デ。〈違っておった〉
69. (毎日梅干しを) 食べている ①マイニチ ウメボシオ タベヨール デ。〈食べおる〉(動作の反復・継続。) ②～ タベトル デ。〈食べておる〉(反復状態の継続。)
70. (毎朝) している ラジオタイソーオ マイアサ ショール。〈しおる〉
71. 気をつけていて(～した) ①キー ツキョーツテ、〈気をつけおって〉②キー ツキョーツタノニ ビョーキ シテ シャツタ。〈気をつけおったのに〉
72. 行ったまま～ アソビニ イツタナーリ カエツテ コン。〈行ったなり〉
73. ～しながら ハナショー ショーリナガラ ハシツトル。〈しおりながら〉
74. ～の途中で～する ①ガッコノ イキシナニ、(古老に多い言いかた。) ②～ イキガケニ、(若い層に多い言いかた。)
75. ～の途中で～した ガッコニ イキョーツタラ センセーニ デアツタ。〈行きおったら〉
76. ～の途中で止めて～した ホンオ ヨミサシテ デカケタ。〈読みさして〉
77. ～したばかりだ ソノ ホンワ キノ ヨンダバツカリダー。〈読んだばかりだ〉
78. 無くなっている ホンノ ウエノ メガネガ ナーナツトルガ ドーシタ ダエ。  
 〈無うなっておる〉
79. 無くなるぞ ①ナー ナツテ シマウ デー。〈無うなってしまう〉②ナー ナツテ シャウ ソ。〈無うなってしまう〉(～シャウくしまう)は古老の言いかた。田舎ふう。きたないひびきがある。)
80. 掛けておいた帽子 カベニ カケツタ ポーシワ ドコニ ヤツタ エ。〈掛けておった帽子〉
81. 並んだ本 ホンダナニ ナランドル ホンワ、〈並んでおる本〉
82. 並べた本 ①ホンダナニ ナランドル ホンワ、〈並んでおる本〉②～ ナラベトル ホンワ、〈並べておる本〉
83. ～しておこうか ①イマノウチニ ヨンドカー カ。〈読んでおこうか〉②～ ヨンドコー カ。〈読んでおこうか〉(若い層ではこれが多い。)
84. やってあるか シュクダイワ ゼンブ ヤツトル デヤー。〈やっておる〉
85. 壊している マタ オモチャオ メギョール デ。〈めぎおる〉(めぐ—壊す)
86. 壊れている コレマデ メゲトル ガー。〈めげておる〉
87. 壊されている コレマデ メガレトル ガー。〈めがれておる〉
88. のけてある メゲタ オモチャー アブナイゲー ドケトル。〈どけておる〉

89. 書き終わった ヤッ<sup>ト</sup> カ<sup>イ</sup>テ シャッタ トコロダ<sup>ー</sup>。〈書いてしまった〉
90. 書いてしまいなさい ①ハ<sup>ヨ</sup>ー カ<sup>イ</sup>テ シャイン<sup>サイ</sup>。〈書いてしまいなさい〉  
(古老の言いかた) ②～ カ<sup>イ</sup>テ シャ<sup>エ</sup>ー。〈書いてしまえ〉(乱暴な言いかた。)
91. 書いてしまう マチガ<sup>ッタ</sup> ジ<sup>オ</sup> カ<sup>イ</sup>テ シャウ ダガ<sup>ー</sup>。〈書いてしまう〉
92. 書いてみた コ<sup>ン</sup>ダー フ<sup>ジ</sup>ノ エ<sup>オ</sup> カ<sup>イ</sup>テ ミタ ダガ<sup>ー</sup>。〈書いてみた〉
93. (孫は今)入院している マ<sup>ゴ</sup>ワ イ<sup>マ</sup> ニューインシトル<sup>ー</sup>。〈入院しておる〉
94. (弟も今)入院しているそうだ オ<sup>ト</sup>ー<sup>ト</sup>モ ニューインシトル<sup>サー</sup>ナ デ<sup>ー</sup>。〈入院しておるそうな〉
95. (きっと)よくなるよ ワ<sup>カ</sup>イダケ<sup>ー</sup> ス<sup>グ</sup> ヨ<sup>ー</sup> ナ<sup>ル</sup> ヨ<sup>ー</sup>。〈よくなる〉
96. (だんだん)よくなるよ ワ<sup>カ</sup>イダケ<sup>ー</sup> ダ<sup>ン</sup>ダ<sup>ン</sup> ヨ<sup>ー</sup> ナ<sup>ッ</sup>テ コ<sup>ー</sup> デ<sup>ー</sup>。  
〈ようになって来うよ〉
97. 歳とるとね、ト<sup>シ</sup>ー ト<sup>ッ</sup>テ ク<sup>ル</sup>ト ヨ<sup>ー</sup>ニ ナオ<sup>ラ</sup>ンヤ<sup>ー</sup>ニ ナ<sup>ル</sup> モ<sup>ン</sup>ダケ<sup>ー</sup>。〈歳をとってくと〉
98. なおらなくなるよ ナオ<sup>ラ</sup>ンヤ<sup>ー</sup>ニ ナ<sup>ッ</sup>テ ク<sup>ル</sup> モ<sup>ン</sup>ダケ<sup>ー</sup>。〈なおらんようになつてくる〉
99. (1) (犬が)怪我したので イ<sup>ヌ</sup>ガ ケ<sup>ガ</sup>ー シタケ<sup>ー</sup>、〈怪我をしたので〉  
(2) (こどもが)怪我したので コ<sup>ド</sup>モガ ケ<sup>ガ</sup>ー シタケ<sup>ー</sup>、〈怪我をしたので〉  
(3) (お父さんが)怪我したので オ<sup>ト</sup>ーサンガ ケ<sup>ガ</sup>ー シンサ<sup>ッ</sup>タケ<sup>ー</sup>、〈怪我をしなされたので〉  
(4) (雨が)降ってきたので ア<sup>メ</sup>ガ フ<sup>ッ</sup>テ キタケ<sup>ー</sup>、〈降ってきたので〉
100. (1) B  
(2) A  
(3) B

### III 総括 (まとめ)

いわゆる進行態と存在態とが、叙法を異にしている。この事態は、主として西日本方言に広く認められるもののようで、当方言でも、この区別が顕著である。進行態は、「動詞連用形+おる」(行キョール・食べョール)によって表され、存在態は、「動詞連用形+て+おる」(行ツトル・来トル)によって表される。「19. ハナガ チリョール。」(進行態)「21. ハナガ チツトル。」(存在態)は、その例である。

一つの事態が、認識・視点の相違により、異なった態によって把握されることがある。例えば、「69. (毎日梅干しを)食べている」で、その事態を、「タベョール」(進行態)とも「タベトル」(存在態)とも把握することができる。前者は、梅干しを食べる毎日の動作を、その反復・継続としてとらえており、後者は、その反復・継続の習慣を、一つの状態としてとらえている。いわば、前者は動作の反復・継続であり、後者は状態の継続・継続である。「61. (昔はいつも)来ていた」も、その例である。

いわゆる瞬間動詞の「死ぬ」も、死に臨んでの、異常な動作の過程に注目すれば、「死ニョール」（死におる）〈38〉ととらえることができる。また、「死ニカキョール」は死にぎわの、いわば断末魔の動作の始まりとその進行に注目しての叙法である。「死ニカケトル」は、その動作進行を、一つの状態として把握しての言いかたとみてよい。「消える」〈8〉の「消ョール」「消エカキョール」「消エカケトル」についても、ほぼ同様のことが言える。蠟燭の火がしだいに細くなっていく過程をとらえて、このように言い表すことができる。

形容詞による心情の推移が、進行態の叙法によって表されるのは注目に価する。「2.（あのころは）おもしろかったなあ」の「オモシロカリョーッタ」、「49.（降らなくて）よかったよ」の「ヨカリョール」などがそれである。存在動詞「ある」に関する「アリョール」〈48〉も、注意される叙法の一つである。

概して、当方言のアスペクト叙法は、多彩である。

（かんべ ひろやす 兵庫教育大学）